2011 年　5 月 2 日 （晴れ） 高知～阿波池田

9 時 30 分

高知駅まで乗った黒い車体のタクシーは、制帽をかぶったお抱えハイヤー風のていねいな物腰のまだ若い運転手だった。助手席の後ろに自己紹介の紙が貼ってあった。＜私の趣味はギターとドラムの演奏と、歌を歌うことです＞　黄砂のせいなのか、晴れているのにフロントガラス越しの遠くの山並みが霞んでいる。信号待ちでこの紹介文のことを尋ねてみた。朝倉の在の人で仲間とバンド活動などをしていたが、それだけでは生活が厳しく、去年からタクシー運転手を始めたのだと言う。
細い抜け道をスイスイと走る慣れたハンドルさばきに感心していると「ええ、もともと車の運転は好きやって、けんど時間が不規則で昼間寝むれんで困っちょります」そういえば昨日、日曜市まで乗ったタクシーの初老の運転手は、釣りが趣味で次の休みには宿毛の先まで行くのだと言っていた。個性豊かな運転手氏が多い。
道路よりも川面が高い江ノ口川沿いの道には信号もなく、車はもう駅前の広い電車通りに出ていた。正面に鯨の肋骨のような真新しい駅の建物が見えている。 どうひいき目に見ても風景とそぐわない気がするが、音楽家運転手君に尋ねると「けんど踏切りがのうなって私らには便利になりましたよ」というまっとうなご意見。車寄せで降ろしてもらい急いでみどりの窓口で切符を買って、あらためて改札口の電光掲示板を見ると、どうやら発車時間を勘違いをしていたらしく、予定の各停阿波池田行きの発車時刻までまだかなりあり、ひとつ前の奈半利行きの快速列車にも乗れそうだ。
駅に来ると何かを買う目あてがなくても、土産物売り場や待合室、キオスク、コーヒーショップなどで、駅の雰囲気にひたる時間が好きだ。しかし新しくなったこの駅を利用するたびに、古い駅舎への懐かしさがつのる。タクシーの運転手は、高架になって踏切りが無くなって便利になったというが、1時間に数本しか来ない列車を、踏切りでワクワクしながら待っていた、小さな男の子たちはもういない。暗く狭い待合室で見知らぬ者どうし、膝突き合わせてぼんやりと過ごした時間、 捨て去ってしまった物のほうが本当は大切だったのではないか、それを確かめたいのかもしれない。

10 時 00 分

駅弁を買うために、弁当売店のある特急列車発着用の 1、2 番線ホームまで長いエスカレーターで上る。 駅前広場を見下ろす高い高架ホームは、肋骨に似た柱と大屋根に覆われてはいるものの、殺風景な吹きさらしで通路も狭く、小さな船の甲板で風にあおられている気分で落ち着かない。
以前は朝倉寄りの構内にあった車両基地が、遠く反対側の土佐一宮駅の先に移動してしまったことも、駅をどこか寒々しくしているのだろう。 ホームには岡山行きの特急が入線していたが、連休だというのに空席が目立ちさびしいかぎりだ。 階段裏側にある小さな弁当売店は看板も目立たず、それと知らなければ見落してしまいそうだ。 弁当が並んでいる低い冷蔵ケースと、飲み物が入っている背の高いショーケースがひとつあるだけの簡素な作りだ。

店番をしている中年女性はアルバイトではなく弁当業者のおかみさんだろうか、見本のサンプルもなく中身が見えない弁当の説明を熱心にしてくれる。
「シイタケ、ミョウガのにぎり寿司と鯖寿司、おかずは高野とゴボウの煮物に海老とかまぼこ、大根漬が入ってるのが龍馬弁当、そうごめんなさい、たたき弁当はもう売れてしもうて」 言葉で中身の説明
「この貝飯も味がしみ込んでおいしいですよ、長太郎貝って言うんよ」
女店主の熱心さにつられ、いっしょに説明を聞いていた若いカップルは、龍馬とよさこい弁当を買い、私はいちばん値段の安い＜おばぁの日曜市弁当＞を買った。発車までまだ時間があるのか、その間も、特急列車はディーゼルエンジン特有の低いアイドリング音をずっと響かせていた。
もう一度階段を下りて北側の各停用ホームへ向かうと、こちらのには意外に大勢の客が列車の入線を待って並んでいた。子供連れや行楽に向かう家族が多いのか、楽しげな雰囲気が溢れている。高架線路の先に待機していた、くろしお鉄道のオープンデッキ付き 1 両編成青色塗装の 9640 系が、クローズアップするかのようにぐんぐん入ってきた。 ホームでは、カメラを構えて写真を撮っている人も多い。列の後ろに並んで乗車すると、すでに満席で 数人の学生達がドアの近くでたむろしている。

「しんたろう号」は海側がオープンデッキの廊下になっているために車内がせまく、山側の通路には収納式の補助イスもあるが、そこも全部ふさがっていた。家族連れのにぎやかなお喋りのあいだをかき分けて最前部まで歩いて行く。前方のドア脇に立って、ふと視線を感じて後ろを振り返ると祖母に連れられた小学生くらいの兄弟が仲良く座っていた。「アッごめんね、ここにいると前が見えないね、むこうに行くね、どこまで行くのかな？」 男の子は祖母にうながされて恥ずかしそうに「アキまで」と答えてくれた。じつは反対側のドア前には、白いフレアスカートの女性が、土産らしい紙袋を持って立っていたので少々遠慮していたのだが、これで大手をふって彼女の向かい側、運転席すぐ後ろに落ち着くことができた。 連休で帰省するのだろうか、きっと都会へ出て働き始めてまだ日にちがないのだろう。垢抜けしない服装のせいか、表情にもどこか暗いかげりがある。 昭和30年、終点奈半利から、廃止まぢかの森林鉄道のトロッコ列車に乗換えて、幼い弟たちが待っている馬路村か、魚梁瀬部落の山奥の古い家に帰る途中なのだ。慣れない街の生活で疲れた心のように、この純白のスカートも家に着く頃には煤け、汚れてしまうのではないか、などと勝手な妄想をふくらませているうちに、いつしか列車は動き出していた。

10 時 19 分 5864D 奈半利行き

田舎には似合わないだろうと思う高架線路から遠くに見える山並みは、やはり茶色く霞んでいた。
久万川を渡ると線路は地上に下りて薊野、土佐一宮の郊外風景が車窓に流れてゆく。このあたりは、ビルやマンションの建物がずいぶん増えた。右手に高知車両基地が近づき、留置列車が並ぶ姿に隣の子ども達がワァーと歓声をあげる。田植えが終わったばかりの水田が広がり、鯉のぼりが泳いでフラフがはためいている。 ごめん駅手前の篠原あたりの築堤は平行する土電軌道線も近く、むかし親戚の家族がいつも手を振って見送ってくれたのもこのあたりだった。 高知駅を発車してから15分

ほどでごめん駅に到着した。ドアから入る風に白いスカートがゆれた。 娘の後ろに続いて跨線橋の階段を上るとすぐ改札口があり、後免駅は真新しい橋上駅になっていた。駅務室とみどりの窓口の表示もあって、特急停車駅であったことを気付かせてくれる。待合室はなく、橋上通路にプラスチックの椅子が無造作に置かれていて、半袖シャツの高校生がひとりだらしなく足をなげだして携帯をいじっていた。次の阿波池田行きが来るまで駅のまわりを散策してみる。狭い駅前広場には、タクシーが1台客待ちをしているだけで人の姿はない。古ぼけた店や事務所のシャッターは閉まり、「野村自転車荷物預かり所」「後免印刷所」とか、かすかに読める看板の文字がさびしく残るだけだ。昼前の白い光のなか、時間が止まった街がひろがっていた。細い取付け道を先に進むと、ほこりっぽい県道をトラックがやかましく通って行く。どちらを見通してみても、とびらを閉じた家並みが続くだけでとりつくしまがない。散策は取りやめて駅に戻り、まだ少し時間が早いがホームのベンチで風に吹かれて待つことにした。意外にもホームには制服姿の女子高生や、病院通いなのか杖をついた老婦人など数人が列車を待っていた。アナウンスがあって、どうやら高知行きの普通列車が先に到着するようだ。

10 時 50 分

下り列車は交換待ちをするでもなく、ホームにいた客が乗り込むとあわただしく発車して行く。その列車に向かって、小さな男の子が祖母らしき女性に抱かれて手を振っているのに気がついた。遠ざかる列車の後ろで母親とおぼしき若い女が手を振っている。列車が見えなくなってから、うしろのベンチに座ったふたりに声をかけてみた。「ボク、お留守番かな」「ええ、今日は保育園が振り替え休日で、ママは仕事なので、私といっしょに留守番なんです、泣かれたらどうしようと心配だったんで、好きな汽車に乗ったら大丈夫かなと思って、いつも踏み切りで見てるもんね、ね、山田からちょっと乗ってきて、すぐ帰るんですよ」 歳をきくと2歳だという。「うちの孫と同じだ、男の子はみな汽車が好きだもんねぇ」「いつも車ばっかりで汽車に乗るのは 2 回目、そうよねェ、毎日家の前の踏切りで見てるんですよ」 男の子はまだ言葉がよく喋れない。思わぬ所でかわいいチビ鉄と遭遇したものだ。

阿波池田行き普通列車が、ポイントで車体を揺らしながら 3 番線ホームに入ってきた。乗り込んだ車内は空いていて、ボックスシートとロングシートがちどりになった1000系独特の椅子、後方に広いトイレスペースがある。前方の長いシートの中央あたりに落ち着く。ヨチヨチ歩いて来たチビ鉄とおばあちゃんは向い側のクロスシートに座れた。交換待ちもなくすぐ発車になった。男の子は小さい膝を伸ばして窓にかじりついている。

11 時 31 分 4242D 阿波池田行き

5 月の陽光が車内にあふれて、実り豊かな香長平野の田園風景が車窓に広がる。地元のお年寄は世間噺に花を咲かせ、旅行者風の若い乗客も何人かいる。運転席では見習い中の若い運転手君が、2 人の指導員に横に立たれて緊張気味だ。呼称喚起の元気な大声がエンジン音に負けずに車内に響く。数分で土佐山田到着。下りる支度をするチビ鉄を見て、そうださっき高知駅のキオスク

で買った、DF50 のチョロ Q があったことを思い出した。出口へ向かうとする男の子に「ボク、今日は泣かないで頑張ったね、これご褒美だよ」と声をかけて、DF50 の入った小箱を差し出した。 びっくりした顔の男の子を抱いていた祖母が、何か言いかける前に小さな手に握らせてあげた。
「いやいいんですよふたつ買ってあったんで、むかしここを走ってたんだょ、この機関車」何度も礼を言う祖母を制して、男の子にさよならを言った。ホームに下りたふたりは、また窓の方に戻って来て外から何度もおじぎをしたり、お礼を言っていた。しかし土佐山田駅では下り特急の通過待ちで、まだしばらく停車するのだ。これはきりがないかなと思いホームに下りて、その旨を話し出口へ向かうようにうながした。チビ鉄君もどうやらやっと手にした物を理解したらしく、ニコニコしていて見えなくなるまで手をふってくれていた。

そんなやり取りのさなか、同じこの列車に乗っていたひとりの若い女が首から大型カメラを下げたまま、跨線橋を駆け上がって、上り特急が到着するとなりのホームへ向かった。一見するとメイドカフェから抜け出したようなフリルのついたスカートに、派手な髪飾りの姿は、とても普通の女子鉄とは思えないいでたち、到着した特急列車を軽いフットワークで撮りまくっていた。さらにこちらへ戻ってくると、発車までの短い間にも、自分達の乗っている車両の撮影にも余念がない。前の出口ドアから入ると、上気した表情で車内を駆けぬけ、陣取っていた後方のボックスシートに戻った。一緒にその様子をながめていた地元らしい作業員風の親父さんと、思わず顔を見合わせてしまった。 網棚を見ると、バックなどが幾つか並んでいるが、背もたれの陰になっていてどういうグループか友達なのか、ひとり旅なのか判然とはわからない。ほかにもカメラを携えた数人の若者もいるようで、いつもの平日とは違う雰囲気が漂っているようだ。土佐山田駅では、乗り込む乗客より下車客の方が多くて、これから四国山地の峻厳な山ふところへわけ入ろうとする、時代遅れの鈍行列車に残った乗客は、結局ほんの一握りほどになってしまった。ロングシートに座っていると見通しがよく、前後左右のパノラマ展望でまわりの景色が流れて行く。列車は小さな町境をあっというまに過ぎて、車窓は灌木におおわれた山裾の風景に変わり、すぐに厳しい上り勾配にさしかかる。

11 時 41 分

昭和 20 年代の土讃線では、蒸気機関車牽引の準急「南風」は、このトンネルが連続する急勾配の難所を、喘ぎあえぎ煙に巻かれながら上っていたという。さっき出会った小さな男の子と同じ歳頃、高知から山陰の松江へ引っ越した時も、その汽車に乗っていたはずなのだ。トンネルに入ると微かに漂ってくる昔の煙の匂いに、記憶の糸を手繰りよせようとしてみるが、そんな感傷を吹き飛ばすように新しい気動車は、軽快な音を響かせ急坂を苦も無く駆け上がって行く。トンネルのあいだに、一瞬だが進行左手に高知平野の広がりが見える所があって、いつも方向感覚がおかしくなる。山と木々の緑の塊をかいくぐり、トンネルと切り通しが繰り返され、急カーブの連続にめまいしそうになった頃、ATS の警告音が響き、右手にスイッチバック用の引き上げ線が見えた。
ポイントを渡る音と共に車体がガクンと左に振れ、新改駅の小さなホームが目に入ってきた。これま

で何度となく、特急列車で通り過ぎていても、駅に停車するのは初めてだ。周囲を見回しても人家らしきものは見当たらない。秘境駅という触れ込みから、荒れ果てたた駅のたたずまいを想像していたのだが、小さいながらも小奇麗な白い駅舎があった。もちろん乗り込む客はいないのだが、停車してドアが開くとと同時に、先ほど土佐山田駅で写真を撮っていた萌え系女子鉄嬢がホームに飛び下りて行った。作業員風の相客とまた顔を見合わせているそばから、ひとり激写モードになってスカートを翻しながら走り回っている。かたや運転手氏は、大声でいちいち確認しながらスイッチ類の切り替えに大わらわ、逆向運転には意外に多くの手順が必要なのだ。マスコンとカバンを抱えて、反対側の運転席へ走るように移動していった。停車してから数分かかっている。しかしドアが閉じられようとしても、ホームに降りたは萌鉄嬢はいっこうに乗り込む気配がない。まさかここに残るつもりかなと思ったその瞬間ドアが閉まり、見送る彼女をホームに残して、列車は引き上げ線に向かって動き始めた。

ホームの端を通過する時、もう一人のカメラを構えた若い男がいることに気がついた。こちらはいたって典型的なオタク系鉄夫君のようだ。彼女の動きに釘付けになっていたので、後ろの出口から降りたらしい彼には気づかなかったのだ。 ホームに残ったふたりは、べつだん知合いではなさそうだ。
ほかに人の気配はなく、オオカミかタヌキでも出そうなこの秘境駅の周囲には、たしか廃屋になった商店が一軒きりあるだけで、民家などは全く無いはずだが、あのふたりは大丈夫だろうか。そんなことをぼんやり考えているうちに、ガクンと列車は止まり、再びバタバタと運転手君が元の運転席にもどってきて、列車は本線に向けて走り始めた。手元の時刻表で調べてみると、なんと次の列車まで上りが 3 時間、下りは 2 時間後まで来ないのだ。通り過ぎるとき一瞬見えたホームには、もうふたりの姿はなかった。

11 時 50 分

次の繁藤駅までは、また急勾配とトンネルの繰り返し。 運転席ではいちだんと大きな声で「繁藤定時！」などと注意喚起を車内まで響かせながら緊張気味の運転が続いていた。分水嶺まで登りきったのか、エンジン音が軽快になった。このあたりまで来ると人家がちらほら見えはじめ、国道を走る車の姿にやっと現実の世界に戻った気がして安心する。繁藤までわずか十数キロのこの難所区間、当時の「南風」はなんと 40 分もかかっている。ほとんど駆け足程度の速度しか出せなかったのだろう。トンネル内で煙に巻かれる事故も数多く起きたという。大正時代の建設工事も困難を極め、多くの犠牲者も出たらしい。これまで高知へ向かう列車でも、この区間を通過する時にいつも感じていた不安感、胸騒ぎはそのせいだったのかもしれない。深い森と山の精霊の棲家、異界だったのではないだろうか。特急列車はいつでも、逃げるようにして全速力で坂を駆け下り、南国の光あふれる高知平野が見えると、やっと不安な金縛りがとけて、生き返った気がしたのもそのせいなのだ。そう思うと、さっきの新改駅での出来事までがなんだか夢の中のことのように思われてきた。 繁藤の名前を聞くと、必ず昔の駅名の「天坪駅」が思い出されるのは、改称された昭和 38 年より以前、物心ついた時分から何度もここを通ったことがあったからなのだろう。四国で一番標高が高く、雨量の多い駅。難読名前が多い土讃線の駅名のなかでも、豪雨災害の悲劇も重なりその特異な名前の響きを今でも忘れ

ることはない。天の坪、そんな天上の川にも思える穴内川の渓谷が寄り添い、今日は好天のもと穏やかな景色が流れてゆく。

気がつくと列車は、土佐北山駅の川の上に架かる鉄橋ホームに到着したところだった。すると背広姿の若い男がたったひとりホームに下り立ち、少し場違いな雰囲気に戸惑ったのか、駅のつくりを確かめるように狭いホームから下の渓谷を覗いたりして、もしカメラを構えてなければ、余程心配な挙動にも見えなくはない。きちんとネクタイを締め革靴を履いた服装からすると、なにか仕事中に打ち合わせも何もかもすっぽかして、いきなり列車に飛び乗ってしまったのかもしれない。誰もいない狭いホームの端で列車に向かって小さなカメラを構えている。細いネクタイが動き出した列車の風にあおられていた。 今日はよくよく風変わりな乗客に出あう日だ。

北川駅を発車するとすぐ長いトンネルが続いて、つぎの大杉駅までほとんど外の景色を見ることがない。トンネルが途中で曲がっているせいで、出口の明かりがなかなか見えない。平坦な線路なのか意外に速度が早く、轟音が車内に響く。やっと遠くに見えた馬蹄形の小さな明かりがなかなか近付かない。ようやく光りのなかに飛び出ると、すぐに大杉駅のホームが見えた。向かいのボックスシートに座っていた、病院通いらしい老女ふたり連れが荷物をまとめている。こちらのロングシートの端に座っていた男性も、知り合いらしく二言三言ことばを交わしながら一緒に下りていった。がらんとした車内にこれで地元の乗客はほとんどいなくなった。大杉駅では上り特急との交換のためしばらく停車するようだ。

山の頂上あたりを探して見るが、はたしてどれが日本一の大杉なのかわからない。 新しい駅舎は山小屋風のモダンな造りだが、不審火で焼失した以前の古い日本風の建物のほうが、しっくりと周りの風景に溶け込んでいたように思えてならない。大杉を出て、穴内、大田口、豊永と吉野川本流沿いの小さな駅を進むごとに、次第に渓谷の姿がその美しさと険しさを増してくる。 その時ふと左肩に柔らかい重みを感じて振り向くと、土佐山田で乗った時からずっと隣りに座っていた若い女性が、睡魔に負けてすっかり寝てしまったらしく、列車の揺れに合わせて長い髪ごと、こちらに凭れかけてきたのだった。ときおりハッと気がついては真っ直ぐ体を起こすのだが、そのうちまた耐えられなくなって体ごと寄り掛かってくる。わずかしかいない乗客の車内で、見知らぬ二人がこんなに息遣いを感じるほど、隣り合わせに座っているのも妙なものだが、まわりの乗客が下車していき、はじめに座った位置のせいでこうなってしまった。 今さら別の座席に移るのもかえって不自然だし、しばらく時ならぬ僥倖を楽しませてもらう。G パンに洗い晒しのチュニック、地味な服装に加え、息をひそめる雌鹿のように存在感が希薄で、乗車してからずっとそばにいても、ほとんど気がつかないほどだった。荷物は小さめのショルダーバックひとつだけで、素性をうかがうことも難しい。

正午を過ぎた明るい光と暗いトンネルがくり返され、対岸の国道を走る車を追い越すほどの速度で、険しい山あいの線路を、1 両だけのディーゼルカーは快走して行く。進むにつれて深くなる吉野川の見事な渓谷、見上げる山腹に張り付く民家の対比が美しく、沿線随一の見所が続く。それにしても隣の彼女、今どき特急列車に乗らずに、何時間もよけいにかかる各駅停車に好き好んで乗る理由がわからない。土佐山田で乗車した時、すでにここに座っていたのか、それともどこかの駅から乗ってきた

のかまるで思い出せない。もし彼女がまぼろしなら、トンネルの暗闇の中でいちど目を閉じてみて、光のなかに出た時それでもまだそこにいるのか確かめなくてはならない。そして、列車が長いトンネルを抜けて大歩危駅に着いたとき、彼女はたしかにまだ隣にいた。

大歩危駅では数人の乗客が乗り込もうとしている様子だったので、空いていた向かい側のボックス席に弁当だけを持って移った。 もともと、このあたりの渓谷を眺めながら昼食にするつもりだったし、荷物をもとの座席に置いたままなのは、彼女にたいして不義理するつもりではないとの気持を伝えたかったのだ。気持ち良い五月の連休、対岸のドライブインには観光バスや自家用車が並び、川は観光船や急流下りのゴムボートでにぎわっていた。窓を押し上げると、渓谷の風がかたまりになって車内に入ってきた。横を振り返ると彼女の長い髪が風に舞っていた。駅弁を広げながら様子を窺うが、とくに変わらない様子でうつらうつらと列車の揺れに身を任せているようだ。小歩危駅の手前で、吉野川に架かる鉄橋を渡ると川の流れは右側の車窓に変わる。そして駅弁を食べ終わった頃、祖谷口駅を過ぎるともう一度鉄橋を渡り、流れがまた左側に戻ると川幅がぐんと広がり、終着池田の街が近づいたことが感じられる。途中、大杉駅での特急列車交換での、5分ほどの遅れは結局回復しないままの阿波池田到着となった。

12 時 37 分

やっと目を覚ました彼女は、それでもまだどこか影が薄い印象で、フラフラと出口に向かっていた。その様子を見ながら、ロングシートに置いたままにしてあった荷物を取って、彼女の後を追ってホームに下り立った。この古い 4 番線ホームには、今はもう使われなくなった石造りの洗面台が残っていて、その横にやはり年代物の木の待合ベンチがあった。次の下り岡山行き特急は 1 番線からの発車なので跨線橋を上らなくてはならない。当然彼女も特急に乗換えるはずだと思っていたが、ホームにある時刻表をしばらく眺めていた彼女は、階段を上がることはせず、何か意を決したようにベンチの方に戻った。まさかという思いで、その時刻表で確かめてみると、どうやら特急のあと4番線から発車する琴平行きの各駅停車に乗車するつもりなのだ。いったい彼女は誰で、どこへ向かおうとしているのだろうか。声をかけたいと思ったが、どこか毅然として人をたやすくは寄せ付けない意志にあふれた雰囲気に、とうとう話かけることが出来なかった。ホームにはもう誰もいなくなって、ベンチに座った彼女ひとりしか残っていなかった。

後ろ髪を引かれる思いで、跨線橋の階段を上がるしかなかった。駅舎寄りの1番線ホームは、徳島方面からの乗換え客も加わってにぎわっていた。もしや混み合っているのではと心配したが、車内には拍子抜けするほど少ない乗客しかいなかった。座席に身を沈めるや、特急列車はあわただしく発車した。動き出した窓から振り返って隣のホームを見ると、ひとりポツンとベンチに座っている、彼女の小さな後ろ姿が見えた。そこだけは別の世界のベールに包まれた時間が流れているようだ。
ホームが小さくフェードアウトしようとしたその時、チョコレート色の機関車に牽引された古い客車が、

駅に入ってくるのが見えたような気がした。それは、あの男の子に渡したおもちゃと同じ機関車だった。

　阿波池田を出発して、佃駅を過ぎると徳島線と分岐して線路は大きく左へ曲がる。吉野川を渡る長い鉄橋から眺めるのどかな里山の風景、桃や杏子林が甘い香りを放ち、実り豊かな田畑は桃源郷にも思える。大カーブを描いて猪鼻峠の分水嶺に挑む2台のエンジン音が奏でる音色が力強いクレッシェンドに変わっていく。心地よい揺れとトンネルの暗い闇に引き込まれるように眠りに落ちてしまった。夢うつつの意識の中で、肩に温かい重みを感じた。ホームにひとり残ったあの女性が乗ったに違いないチョコレート色の列車はどこへ向かったのだろう。

おしまい